記念講演

あさのあつこ先生と中高生のトークセッション
「いま、若者に伝えたいこと」

講師　あさの あつこ

記念講演には、『バッテリー』『Ｎｏ．６』『Ｔｈｅ　ＭＡＮＺＡＩ』などの作品で幅広いファンを持つ作家、あさのあつこさんをお迎えしました。

今回は「図書館と県民のつどい」初の試みとして、あさのさんと県内の中高生を交えたトークセッションの形式で実施しました。

トークセッションに参加したのは、熊沢優愛さん（中学２年生）、関根瑞希さん（中学２年生）、長澤園乃子さん（高校１年生）の３名。司会は、県立川口北高校の小池由美子教諭がつとめました。セッションは、中・高校生３人が自分たちの読書体験を語るところから始まりました。

私の読書体験

舞台にあがってくれている３人とも、小さいときから本に親しんでいて、しあわせなんだなあと思いました。私は子どもの頃、本をあまり読まない子でした。私が住んでいる岡山県の美作市は、本当に田舎です。私が小さい頃から、今も、小･中学校に司書さんはいませんし、本を読む公の場所がありません。私は毎日、野山を駆け回り、川で水遊びをしながら過ごし、本と親しんだ経験はまったくありませんでした。

本は不思議な存在です。人間に近いものがあると思っています。出会うべくして出会う本は、ちゃんと私のことを待っていてくれます。中学生のときに、シャーロックホームズシリーズに出会い、**『バスカビル家の犬』**にはまりました。物語ってこんなにおもしろいんだと、心から感じることができました。

本はここではないどこかに、私を連れて行ってくれる存在です。中学生のときは閉塞感があって、私はどこにも行けないという気持ちがいっぱいでしたが、本が私を解放してくれました。中学･高校生時代に、本当にたくさん本を読みました。そして読みながら、「読む人」でなく、「書く人」になりたいと、心から思いました。めんどうくさがり屋の私も、書くことだけは続けられたのです。

作品について

『No. 6』は、私の中でも異質な作品です。私は主人公を描きたいという想いで小説を書いている作家です。『バッテリー』も巧を、『The MANZAI』では歩を書きたくて物語が生まれました。

ところが、9. 11 のテロが起こり、善か悪かをはっきりさせようという世界観に出会って、それがとても嫌でした。国家と個人について何か書きたい。若者に読んでもらえるものをと考えて、『No. 6』が生まれました。

9. 11 が起こり、新聞報道で、テロリストの少年が「僕たちはどうしたら君たちと友だちになれるだろうか」と人質に語ったということを知りました。その記事から、ネズミというキャラクターが生まれました。彼がどうやって人を憎むようになったか考えていくと、紫苑が浮かんできて、書いているうちに、紫苑がいとおしく、ネズミがかっこよくなって、二人の物語になりました。

物語の中で、２人を生き延びさせたい気持ちが強くなり、最終巻がやっと出せました。誰か一人くらい、登場人物を殺してしまおうかと思って、イヌカシを殺そうとしましたが（笑）、イヌカシを愛してしまい殺せませんでした（笑）。読者からは、この終わり方はないでしょうという不満の声もたくさんいただいていて（笑）、来年あたり、書ききれなかったところを短編集にまとめようかと思っています。

『ランナー』については、続きを書きたいと思っています。私はスポーツをしないけれど、取材をしながら、走りきる身体というのはどういうものか考えています。自分の知りたいことを知るのは、書くことでしかできないので、『ランナー』の続きを着想中です。

Q「あさのさんは、なぜ、子どもの気持ちがわかるのですか？」

私には男の子２人と女の子１人、３人の子どもがいます。３人とも成人しています。よく、物語の主人公のモデルはお子さんですか？と聞かれるのですが、私はかっこいい少年が好きなので、子どもはモデルではありません（笑）。私は、こうありたいと思っている「わたし」をモデルに作品を書いています。

大人はなぜ、若い頃、１０代の頃のことを忘れてしまうんでしょう。読者からの感想でも、「若い頃のことを思い出しました」という手紙をよくいただくのですが、それが不思議です。私は１０代の頃、いつも悔しい思いをして、それをずっと引きずって大人になりました。そして、物を書く人間になりました。いまは、１０代なら１０代、２０代なら２０代をちゃんと完結して大人

になった人は物書きにはならない、自分が変だなあ、嫌だなあという鬱屈した心を持っている人が物書きになるのではないかと思っています。小説家は変わった人が多いですから（笑）。今の１０代も、昔の１０代も、抱えているものは同じだなあと感じています。

Q「あさのさんが、お母さんとして思っていることは？」

子どもはモデルにしないと言ったのですが、『**ガールズ･ブルー**』のモデルは、自分の娘です。今、２６歳で子どももいる子ですが、小さいときから変わった子で、「生まれ変わったら何になりたい？」と聞いたら、「自由に生きられるネコになりたい」といったので、「人間だったらどういう人間になりたいの？」と聞いたら、「私は私に生まれ変わりたい」と答えました。自分に対する絶対的自信があるんですね。前を向いて生きる力を、娘から教わりました。

大人って偽善的になる時があるじゃないですか。娘が小学校のときに、クラスが騒がしくなったことがあって、親としてお説教しました。「あなたが勉強しないのはあなたの勝手だけれど、学校は勉強をしに行くところだから、人に迷惑をかけるな」って。そうしたら、娘から「お母さんは物を書く人なのに、他のおばさんと同じことを言ってもいいわけ？」って言われて、すごくショックでした。それからは、娘を「心の師匠」と読んでいます（笑）。

大人は色々な物を背負うし、支配する気持ちがある。子ども達の嗅覚は鋭いので、自分達を思うように動かしたいと思っている大人が嫌でたまらないんです。私も小さいときはそうでした。でも、私は大人として、世間に認められるちゃんとした子どもを育てたいという思いも持ってきた。その２つを私は経験しているというのが大きいのだと思います。

「3.11 の東日本大震災も踏まえて、今の日本の若者達へメッセージをお願いします」

今はとても難しい時期だと感じています。私たちは、地震も津波も、昨日までの暮らしが一瞬に無くなる辛さを知りません。被災された方に何をお話したらいいかわからないのです。でも、口をつぐんで何も知らないといったら、物書きとして負けだと思うので、これから物を書くことで闘っていきたい。

生きていなければわからないことがたくさんあって、本に出会って世界がつながっていることを知って、今、ここにいることができる。生きていれば、明日の運命を変える何かに出会えるかもしれない。明日を生き延びた者だけが、明日の可能性をつかむことができる。今、そんな風に思っています。

あさのあつこさんは、とても明るくファンサービス旺盛な方でした。おかげで中高生たちも緊張を見せず、楽しく意見を言うことができました。司会の小池由美子教諭が、あさのあつこさんと中･高校生の橋渡しをして、和やかな中で考えさせられる時間を会場のみなさんと共有することができました。

あさのあつこさんプロフィール

1954 年、岡山県生まれ。1977 年青山学院大学卒業。
岡山市にて小学校の臨時教諭を務めた後、結婚。３児の母。　子育てをしながら 1991 年『**ほたる館物語**』で作家デビューを果たし、 1997 年、『**バッテリー**』（角川文庫）で野間児童文芸賞受賞、 1999 年、『**バッテリー２**』で日本児童文学者協会賞、 2005 年、『**バッテリー**』全 6 巻で小学館児童出版文化賞を受賞。　ほかの作品に『**火群のごとく**』、『Ｎｏ．６』、『Ｔｈｅ　ＭＡＮＺＡＩ』など多数。

【あさのあつこさんから「図書館と県民のつどい」にいただいたメッセージ】

みなさん、こんにちは。あさのです。
このごろ本を読むことは、旅に出ることににているなと、思うようになりました。
温泉に浸かって、日ごろの疲れをとったり、見知らぬ風景を眺め心身をリフレッシュしたり、思わぬ出来事に遭遇したり、多くの人間に出会いときに歓喜をときに恐怖をときに驚愕を味わったり。
わたしの本がみなさんをどんな旅に誘えるのか、とてもどきどきしています。よろしくお願いします。

あさのあつこ

次頁では、あさのあつこさんに送られた、たくさんのメッセージを紹介します。